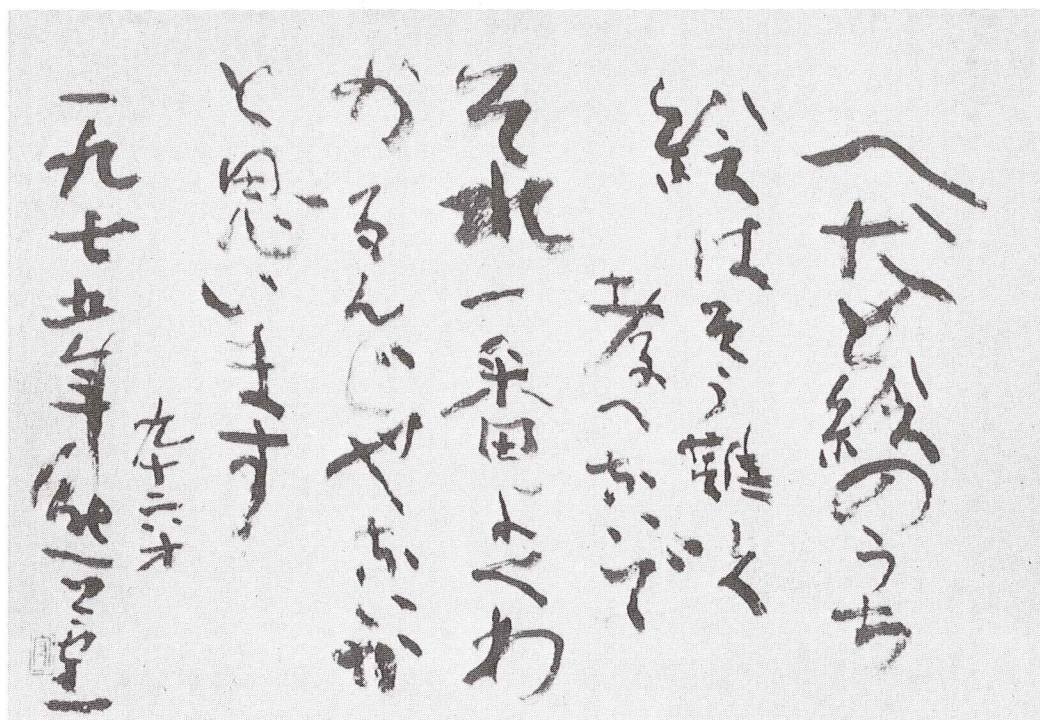


# かたりべ

1

豊島区立郷土資料館だより



## 書 へたも絵のうち

熊谷守一の言葉として「へたも絵のうち」はよく知られています。自伝の題名にもなっていますが、その自伝の中では「絵などは自分を出して自分を生かすしかないのだと思います。自分にはないものを無理になんとかしようとしても、ロクなことにはなりません。だから、私はよく二科の仲間に、下手な絵も認めよといっていました。絵はそう難しく考えないで見たら、それで一番よくわかるんじゃないかと思えます。」と書いています。

また「じょうずなんていうものは先がみえてしまう。へたはどうなるかわからない。へたの方がスケールが大きい。」とも語っていました。さらに「絵でも字でもうまくかこうなんてとんでもない。」とも書いていました。以上のような意味を込めて「へたも絵のうち」という言葉を使っていたわけです。

写真に掲げた書は、守一がなくなる二年ぐらいい前に書いたものです。そのころ、守一の出身地である岐阜県付知町に熊谷守一記念館が建てられていました。この書は現在も記念館に所蔵されています。

豊島区立郷土資料館は昨年第一回特別展「富士講と富士詣」を行いました。今年は第二回特別展として「へたも絵のうち」——熊谷守一のアトリエとくらし」を開催します。会期は七月二日から八月四日まででした。

熊谷守一は自然を愛し、俗世間を超脱し、自分に対してすなおに生きつづけようとした人でした。生れは岐阜県恵那郡付知村ですが、父が初代岐阜市長をつとめ、市内で製糸工場を経営していた関係で、岐阜市に育ちました。守一は小さい時から絵が好きで、父の反対をおしきって、東京美術学校に入り、そこで洋画を学びました。年をとってから、日本画を描くよう

### 〈特別展〉 へたも絵のうち

#### ——熊谷守一のアトリエとくらし——

になり、また書も頼まれてよくかいていました。それとともに、洋画も見たままを細かく描くことから、平らに塗る絵に変わります。

守一は一九七七年に九七歳でなくなるまでの後半生、四五年間を豊島区千早町の家に住みました。庭はそう広くはないが、木や草がうっそうと茂り、家も古くなっていましたが、住み馴れて自分の家らしくなったといっていました。画室に置かれた台や棚などはみかん箱を利用して自分で作ったものです。絵の道具も手作りのものや、使いやすいように加工したものや、何

回も修理したのを使っていました。

絵を描くとともに、音楽を楽しみ、大工道具などの金物いじりが好きで、時計修理もできました。鉄屑や道端の石なども拾ってきて、大事にとっていました。庭の中に「天狗の腰かけ」と呼んだ休み場所をこしらえて、散歩をしたり、落葉や紙屑を燃したりもしていました。たばこはひっきりなしに吸っていたが、紙の臭いが嫌いで、紙まきではなく、パイプを使っていました。碁は毎日のように夫人と打っていました。今回の展示会では、画家熊谷守一の生活や絵

の創作活動のようすを、残された遺品や写真でのしる、そこから人となりをはかりにしよう

とすることをねらいとしました。遺品や作品は長男の黄さん、次女の榎さんや熊谷守一記念館などが持っていたものです。展示は絵・書・彫刻などの作品が一二点、熊谷守一をモデルにした関係者の作品が二点、写真が二二点、遺品が九〇点余り、および年譜などで構成しました。この特別展のようすは図録『へたも絵のうち』（頒価一〇〇〇円）を御覧ください。

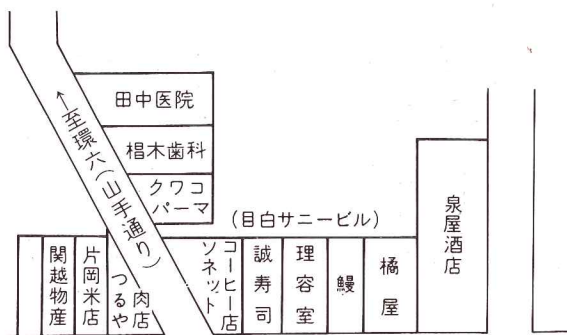
### 「寄稿」

#### 権名町慶徳屋のこと

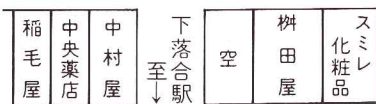
高田恵義

江戸後期の村尾正靖著「嘉陵紀行」の中に「権名町の入口一豪家あり、慶徳屋と名づく。この地に久しきもの也とて穀物をあきなふ」、また「権名町慶徳屋が小さき岐路あり」とあって、長崎村への道しるべになっていた慶徳屋の記述があります。今はその知る人もない慶徳屋について、私なりに調査したことを書き留めてみたいと思います。

慶徳屋は穀商でしたが、塩や茶も商っていました。現在の目白五―四の目白サニール（桑子シゲノ氏所有）から橘屋煙草店・泉屋酒店までの目白通りに面した一角約九百坪にあたり、間口二〇間、土蔵二棟が建ちならぶ豪商でした。最盛時の家族店員数は約一七―八人であったといえます。開店年代は不明です。慶徳屋は明治末年には衰微してしまい、道を隔てた隣の角、現在のつるや精肉店の場所も、名も新丸屋と変えて煙草と塩を商っていました。新丸屋のときの家族構成は、祖母―母（せき）―子（とき）の三人でした。新丸屋の商号は、権名町通りにあった質屋兼呉服商の親類丸屋からとつたものです。慶徳屋の跡は内田浅蔵氏（建築業・村会議員）・橘煙草店・泉屋酒店の所有となりました。



← (至二又交番) 目白通り (至目白駅) →



慶徳屋周辺現況見取図

内田宅は菊菱百貨店に賃貸されていましたが、現在はクワコマ、目白サニービル（コーヒー店ソネットなどの商店入居）となっています。慶徳屋跡の旧地番は、長崎村荒井一九〇三番地、長崎町荒井一九五〇番地でした。慶徳屋衰微後、穀物は五郎窪通りにある岩崎万吉氏（糠屋）で取扱うようになり、お茶は明治末から大正時代にかけて、御茶熊で名をさせた岩崎園で取扱うようになりました。

江戸時代から大正初めまで長崎村を東西に横切る清戸道（椎名町通り、五郎窪通り）筋にたくさんのお茶屋がありましたが、慶徳屋は御茶を買いつけにきた江戸の御茶商人の目じるしとなっていました。また、貫井・練馬方面の百姓

が荷車を引いての帰道、慶徳屋から種籾やたくさん漬に使う塩を買って帰ったものです。この慶徳屋は戦後、店のあった場所どころか屋号すら町の人々の頭から忘れ去られていました。慶徳屋のことは前出の桑子シゲノ氏七五歳、埼玉県入間郡坂戸町千代田二一三一内田好政氏の妻、新宿区下落合三一―二一―三松尾ハツ氏九一歳などの方々からお聞きしました。

(長崎四一〇一〇)

シリーズ 地名のはなし 第一回

現在の豊島区が成立したのは昭和七年です。それ以前の豊島郡は『万葉集』にも出てくる古い地で、23区の中心部をほとんど占める広い地域でした。豊島はトシマ・テシマと訓じ、その由来には諸説あります。

豊

全国のとしまを拾ってみると東京には我が区以外に北区豊島があります。荒川沿いの低平な土地です。伊豆諸島に利島があり、火山島でお椀を伏せたような砂浜のない島です。千代田区にも豊島町がありましたが、これは新しい地名です。明治十八年内務省地理局の『地名索引』によればトシマは（トヨシマも含）十四あります。有名なのは撰津豊島郡で

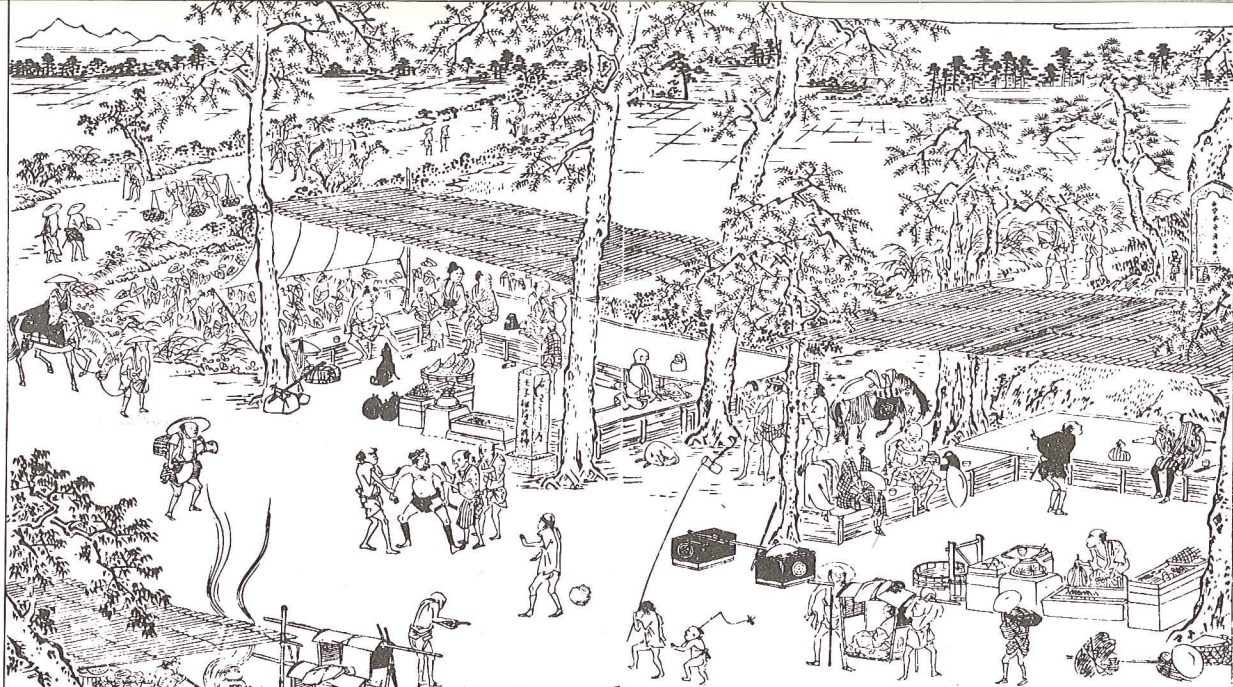
島

豊島筵の産地です。これは藺草製で、ここからみても低湿地を含んでいたことが分ります。他に三河南設楽郡、渥美郡、岩代耶麻郡、陸奥北津軽郡、安芸豊田郡にも豊島があります。伊勢安濃郡、武蔵北葛飾郡、羽後河辺、但馬城崎、美作西三条、安芸高田、肥後訥麻には戸島があります。吉田東伍の『大日本地名辞書』にはその他に、撰津西成郡中津川の河口付近を富島と称したとあり、下総東葛飾郡、伊予北宇和島、淡路津名郡にもあります。

このような全国のとしまはほぼ次のような地形的特徴を持ちます。①川・海の近くか、②そうでない場合も際立った高地であることです。つまり、河口のような地でも洲ではなく高地であるような土地です。吉田は下総東葛飾郡の豊島郷を説明して、「出張りたる岬状の地に因めるにて、津島なるべし——島状の高地なり」と述べているが、  
 妥当な見解でしょう。

しかし、注目すべきはこの景観は海から眺めたものであるということです。豊島駅は東山道に属していましたが、それは律令政府の制度であって、この地域の人々にとっては海—東海道との結びつきの方が先行していたのではないのでしょうか。

(蔵持重裕)



図絵にみる庶民生活 第一回

長谷川雪且描く巢鴨庚申塚の立場茶屋の光景。『江戸名所図会』巻四（一八三六年刊）のさし絵です。巢鴨庚申塚は中山道の江戸と板橋の半路に位置し、絵中に活写されているように葎簀掛の茶をひさぐ簡素な団子茶屋がありました。人夫や旅人がひと息つく場所を立場といいました。真夏の昼さがり時なのでしょう。汗をふく人、扇や団扇をおおぎながら歩く人はいかにも暑そうです。人夫は裸足の者が多かったことがわかります。茶屋のスイカがおいしそうです。描かれた人物も色々で、武士、商人、坊主、駕籠かき、さらに三味線があるので夫婦子連れの旅芸人らしい姿などがみえます。庚申塚 申団子で犬と戯れたり、虫取り網を持ちとんぼ釣りに出かける子供の姿は無邪気です。人物の視線に注目すると、駕籠かき・馬子ふうの人夫同士のらみ合い、両者を引離す茶屋の亭主や人夫仲間という場面が浮かびあがります。人夫のたむろする立場は喧嘩が絶えないということを雪且は巧みに構図の中に生かしているのです。絵の右上に庚申塚の地名の由来である庚申塔（一五〇二年の板碑がこわれ、一六五七年に再建したという）があります。左上遠景にみえるのはおそらく筑波山でしょう。王子道の道標など他にも興味深いものが描かれています。（菊池勇夫）

（入館票より）

戦時中のことなど話しには聞いていても、日常豊かな暮らしをしている私たちには想像し難いのです。が「ヤミ市」の模型や普段見ることのできない道具類が展示されているのを見て、とてもよくわかりました。（18歳・女）

自分は現代人とはかり思っていました。道具類を見て小学生時代に実際に手掛けたものばかりで、おどろかされました。（39歳・女）

小学校の娘が学校からつれてきてもらい、印象をとて楽しく語っていましたので、いつか来たいと思っていました。今日はその機会を得ました。ヤミ市などなつかしく、農家の器具もめずらしく見ました。（43歳・女）

昔をなつかしくみせて頂きました。もっともつと資料を持っていらっしゃる方が提供して下さるとよいと思います。（62歳・女）

できれば、もう少し、館内を広くし、資料を増やして欲しい。（27歳・男）

極めて清潔、非常に参考になりました。皆がみる様PRが必要と思いました。（65歳・男）

かたりべ  
No.1

1985年11月1日  
発行  
豊島区立郷土資料館  
豊島区西池袋2-37-4  
電話03-980-2351